鄭谷「聊か子美の愁に同じ」論

加藤国安

はじめに

陸游いわく「唐は大中より後、詩家、日びに浅薄に赴く」（「又、花間集に跋す」）と。宣宗の「大中」年間は、八四七年から始まり八六〇年（咸通元年）をもって終わる。この大中年間で注意すべきは、各地の州で藩鎮に対する乱が勃発するようになる点だ。続く懿宗の咸通年間（八六〇～八七四）になると、州民が大量に流民化し官憲への集団的抵抗が強まり、乾符二年（八七五）の黄巣の大乱へと発展していく。

翰林学士劉允章が懿宗に奉った「直諫書」（『全唐文』巻八〇四）のごときは、当時の時弊を鋭く写して圧巻である。「天下の百姓、道路に哀号し、山沢に逃竄す。夫妻は相活きず、父子は相救はず。百姓、冤有りて州県に訴ふるも、州県は理めず。宰相に訴ふるも、宰相は理めず。陛下に訴ふるも、陛下は理めず。何を以て帰さんや。…陛下の左右、人の敢へて言ふ無く、但だ潤色美詞を知り、情を悦し志を暢ぶるのみ。豈に千里の零落、万里の凋落せる者を知らんや」と。すなわち、大中と咸通の境界は、晩唐期の分水嶺と捉えられる。この分岐点前後の詩風の違いは、当時の社会世相と深く関わっている。

咸通前には李商隠・杜牧・温庭筠らがおり、後には羅隠・聶夷中・皮日休・陸亀蒙・杜荀鶴・鄭谷・斉己らがいる。前者においても時世を傷む作品はあるが、後者になると全土が戦乱と流離に覆われ、唐朝滅亡の終楽章が鳴り響く中、悲哀と衰微の残照を色濃く映した詩文がますます顕著になってくる。その一端として、世道の衰微にともない杜詩の文学的陰性に強く共鳴したり、また杜甫の足跡を実地に訪ねるか[1]、あるいは現地を想像したりする形で、杜甫

の思いを共有する傾向が広がりをもってもくる。

たとえば詩題に明記するものだけを掲げても、趙鴻の「杜甫の同谷の茅茨」詩（『全唐詩』巻六〇八　なお『杜詩詳注』附編「諸家詠杜」では、副題に「唐咸通十四載作」と記す）、羅隠の「耒陽の杜工部の墓を経」（同巻六六二）「杜甫集に題す」（巻六六五）、裴諧の「杜甫の墳を経」（巻七一五）、裴説の「杜工部の墳を経」（巻七二〇）、徐介「耒陽の杜工部祠堂」（巻七七五）、貫休の「杜工部集を読む」（巻八二九）、斉己「耒陽に次りての作」「杜工部の墳を弔ふ」（巻八四三）、可朋「杜甫旧居」（巻八四九）、および孟賓于「耒陽の杜工部の墓を経」（『全唐詩補逸』巻十六）、李節「耒陽にて杜子美を弔ふ」（『杜詩詳注』「諸家詠杜・続編」）、牛嶠「陳拾遺の書臺に登り杜工部の留題を覧、慨然として詠を成す」（『永楽大典』巻二一三四「陳子昂」の末尾付近）等が列挙される。たとえば裴説の句だが、「騒人　久しく出でず／安んぞ国風の清からんを得む／孤墳を掘り破り／重ねて大雅をして生ぜしめんと擬す」という。杜甫の墓を掘り起こしてでもその大雅を現しめんというほど、世は行き詰まってしまったのである。

同じ杜甫へのシンパシーでも、中唐のときは社会の屋台骨はまだ堅固だったから、非凡な天材との僥倖的遭遇がかなえば、杜甫のいうごとき変革は不可能ではない状況にあった。その機運が高まった時に、多弁な言説や過剰な言動を許容しつつ、一定の連帯感のもとに現実の改革へと突進できたのである。しかし、晩唐後期の杜詩理解のあり方は、それとはまったく異なった。四分五裂して錐揉み状に墜ちていく中、もはや唐朝改革への求心力の巻き起こる余力はなく、なすすべもなく激流に押し流されていくばかりとなった。無力感ただよう現状を、ただ杜詩の言葉のうちに確認するよりなかったのである。

その中で最も重要な人物が、「咸通十哲」中、最高の詩人と評される鄭谷（八五一？～九一〇？）である。鄭谷は後年、自らの作品集をまとめて「雲台編」をなすが、その「自序」にはこういう、「谷、風雅に勤苦するは、騎竹の年より則ち賦詠する有り。属対・音律の未だ暢びやかならずと雖も、諷を旨とすること無からず」と。それがやがて巴蜀・荊楚を漂泊するようになると、杜甫の足跡をたどりつつあたかも杜詩のごとき詩を詠むようになる。そこから鄭谷の呻きが発せられる。いわく、「騒雅　全く休み道甚だ孤なり」（「将に瀘郡に之かんとして遂州に旅次す」）

と。この「騒雅」は、詩経・楚辞を一体にした語彙だが、『全唐詩』を検するに高適・杜甫に始まり、鄭谷が最も多く五例、李中・斉己に各三例見られ、いずれも時世の苦難と深く関わる形で表出されている。また「風騒」の語彙だと、鄭谷六例、李中八例、斉己二二例となり、やはり晩唐期に多用される。鄭谷が平生「騒雅」「風騒」の強い思いを持っていたことが理解されるが、その精神とは、鄭谷の詩集を精読するに、杜甫の心を少なからず指すことを、今回具体的な作品像の全体において摑むことができた。すなわち鄭谷とは、杜甫の「騒雅」（「才の騒雅を継ぐ有り」―「陳拾遺故宅」詩『杜詩詳注』巻十一）や、「風雅」（「別に偽體を裁して　風雅に親しむ／転（うた）た益ます多師なるは　是れ汝が師なり」「戯れに六絶句を為す」其六）の気概を抱いて生きたような人物なのである。だが、鄭谷の杜詩理解についての体系だった議論は、従来ほとんどない。[2]

小論はその「騒雅」「風騒」的美刺を検証し、あわせて彼の杜甫理解の全体とはどのようなものだったのかを、明らかにしようとするものである。なお鄭谷のテキストとしては、趙昌平等の『鄭谷詩集箋注』（上海古籍出版社　一九九一）がこれまでの研究では最もすぐれる。[3] けれども、杜甫の語彙・表現に関わる精査に不足があるのが惜しまれる。小論は、その欠を補う目的をも有する。

一　科挙、落第の中で―杜甫への思慕

鄭谷、字は守愚、袁州宜春（今の江西省宜春）の人。およそ唐の宣宗の大中五年（八五一）生まれ。父鄭史が国子監易学博士だったこともあり、幼少期は父に従って長安で過ごし、五歳頃、馬戴にその神童ぶりをほめられ、「他日、必ず名を垂れん」（鄭谷「雲台編自序」）と言われたという。また鄭谷は幼少時から詩がうまかった。七歳の時には、父が永州刺史の任に就いたのに従ったが、十八歳前後は、荊門に隠棲風の暮らしをしていたと考えられる。懿宗の咸通十二年（八七一）秋、二十歳の時、袁州の郷貢から長安に行き科挙の試験に挑戦するが、失敗。折しも唐末の大乱に巻き込まれて、巴蜀・荊州地方をさすらうようになる。それから十六年後、やっと進士の試験に合格。しかし任官の連絡はなく、また数年して今度は荊楚・呉越地方を漂泊。景福二年（八九三）、鄭谷、四二歳頃、ようやく最初の官に就く。けれど

も官吏としての働きはほとんどできなかった。乾寧三年（八九六）の作[4]「順動後、藍田の偶作」にはいう、

且言無所補　且に言ひて補ふ所無ければ
浩嘆欲何如　浩嘆して何如せんと欲す

無力感がただよう中、その後、右拾遺や補闕・都官郎中などとして朝政に関わるも、乾寧四年頃、「此の生　若し騒雅を知らずんば／孤宦　如何にして近臣と作らん」（「巻末偶題三首」其三）と慨嘆して、天復二年（九〇二）～三年頃隠退、後梁の太祖開平四年（九一〇）頃卒した。以上がその概略である。

まず鄭谷の若き日から見ていこう。咸通十二年～僖宗の広明元年（八八〇）は、鄭谷二十～三十歳にあたり長安困窮期である。咸通末年、長安に移った後、一度、汝州に赴き幕賓となるが、おおむねは長安で科挙の受験準備を中心に活動していた。同州の解で首席となったものの、門地が低かったために合格しなかったという。失望の中、鄭谷の努力は続けられ、やがて復古派の曹鄴、苦吟派の李頻、また薛能らの影響を受けつつ、許棠、張喬らとともに「咸通の十哲」（『唐摭言』巻十）の一人として認められるようになる。

この頃、科挙受験の苦しさを詠むものが多いが、中でも典型的な詩は次例である。

「輩下冬暮詠懐」　「輩下の冬暮、詠懐」

永巷閑吟一徑蒿　永巷　閑吟す　一径の蒿
輕肥大笑事風騷　軽肥　大笑す　風騒を事とするを
煙含紫禁花期近　煙は紫禁を含んで　花期近く
雪滿長安酒價高　雪は長安に満ちて　酒価高し
失路漸驚前計錯　失路　漸く驚く　前計の錯
逢僧更念此生勞　僧に逢ひ更に念ふ　此の生の労するを
十年春淚催衰颯　十年の春涙　衰颯を催す
羞向清流照鬢毛　羞づらくは　清流の鬢毛を照らすに向かふを

乾符五～六年（八七八～八七九）頃、鄭谷二七～八歳頃のもの。「軽肥」は、杜甫「秋興八首」其三の「同学の少年　多くは賤しからず／五陵の衣馬　自ら軽肥」（「同学少年多不賤／五陵衣馬自軽肥」）を意識しよう。金や地位しか頭にない富裕で浮薄な若輩が、世を救うべく登科をめざして励む鄭谷を冷笑するの

図だ。その時の嘲弄や鄭谷の悲しげな胸の内はどこにも示されない。過去の事実は時空を越えて人間の耳目に届くことを想定していない。失われた現実は、意識的な働きによってのみ回復される。彼らの言動を想像することで、文学的リアリティの一端が開示されるのだ。おそらく彼らはこう言い放った。――こんな泥沼の世の中、糞まじめに古典の勉学などしよって――。なにせ当時の金持ち連中ときたら、「金玉の珍を糞土として／猶ほ未だ著侈ならざるを嫌ふ」（羅隱「秦中の富人」詩）有様だったから、鄭谷など一閃のもと斬り捨てられたようなものだ。鄭谷は、自らこう自問する。「自分は無駄なことをしてきたのではないか。お坊さんに会うと、ますますそう思えてくる。まったくお恥ずかしい次第よ」と。鄭谷のやりきれない徒労感や焦燥感、屈辱の念などが生々しくわき起こってくるではないか。

黄巣の乱が江南地方を席巻したのは、乾符三～広明元年（八八〇）頃だ。鄭谷はその様子をこう描写する、

「久不得張喬消息」「久しく張喬の消息を得ず」
天末去程孤　天末　去程孤なり

沿淮復向呉　淮に沿ひ　復た呉に向かふ
亂離何處甚　乱離　何処か甚し
安穩到家無　安穩　家に到ること無からん
樹盡雲垂野　樹尽きて　雲　野に垂れ
檣稀月滿湖　檣稀にして　月　湖に満つ
傷心繞村落　傷心　村落を繞れば
應少舊耕夫　応に少くべし　旧耕夫

天の果ての一人旅、淮から呉へ向かえば、そこは戦乱の真っ只中。惨状の地域がどこかを察しながらの危険な旅。このままでは穏やかに家に至れるものやら。木立は尽きて雲が野に垂れ、舟の帆柱は稀に月は湖水に満々と。傷心を抱きつつ村をめぐれば、耕夫らしき姿も見かけぬ。ああ、張喬は無事でいるのやらという。張喬は鄭谷とともに「咸通の十哲」の一人とされた池州の人。

鄭谷の詩中よく知られる一首だが、何といっても頸聯に目が向く。一読して、杜甫の「星垂れて　平野闊く／月湧きて　大江流る」（「旅夜書懐」）との響き合いから生まれた句と分かる。また杜句の「危檣独夜の舟」と鄭句の「檣稀にして」「去程孤なり」とは、発想がほぼ同一。少年の頃から「風雅に勤苦」

してきた鄭谷だが、「乱離」の中、孤独な旅程を杜甫に重ねつつ、世の「大笑」に耐え「風騷」の孤塁に懸命に立ち続けた様が目に浮かぶ。

困難に打ちのめされそうになりながらも、「風騷を事とする」者たるべし、――それは鄭谷の信念として一生を貫くものとなっていく。救いのない世の暗さのゆえに…。たとえば、乾寧元年（八九四）、鄭谷四三歳。朝廷の官となって以後の句と思われるものに、「惆悵堪へたり／風騷　頗る寂寥」（「寄せて元秀上人を懐ふ」）、また晩年の頃と考えられる詩に、「風騷　線の如くして　悲しみに勝へず／国歩　多艱なるは　即ち此の時」（「前集を読む二首」）等とあり、鄭谷の「風騷」「騷雅」の志が生涯にわたることを物語る。また九世紀末、兵部郎中の任にあった盧光済に贈った鄭谷詩にこういう、

七子風騷尋失主　（建安の）七子の風騷　尋ぬるに主を失し
五君歌誦久無聲　（竹林の七賢のうちの）五君の歌誦　久しく声無し
…
才大始知寰宇窄　才大にして　始めて知る　寰宇の窄きを
吟高何止鬼神驚　吟高くして　何ぞ止まらん　鬼神の驚くに
（「兵部盧郎中光済より詩集を借示され、四韻を以て之に謝す」）

ここでも鄭谷は「風騷」の伝統を強調し、それを継承する盧光済の詩才を、鬼神を驚かすに止まらないと称賛する。この語も、杜甫の「筆落つれば風雨を驚かせ／詩成れば鬼神をも泣かす」（「筆落驚風雨／詩成泣鬼神」「李十二白に寄す二十韻」）を踏襲しよう。

「輩下の冬暮、詠懐」詩に戻る。艱難辛苦の長安にあること、十年。鄭谷は科挙の試験に落第を続ける中、自分は「路を失した」という悔悟と焦慮に襲われるのだった。そして徒に「此の生の労する」ことを思い、わが身が「衰颯」を増していくことに涙する。出仕と仏門への思いとは、彼の中で常にないまぜになって存在するものだった。その両面性に彼の杜詩受容の独特の色合いも、ひいては鄭谷という詩人の慰藉性も見られるのだが、それは後述することとする。

長安困窮時代、悲哀に沈潜する中、鄭谷は徐々に

自らを杜甫に重ねていく。その典型的な事例が次の詩である。

「送田光」

九陌低迷誰問我
五湖流浪可悲君
著書笑破蘇司業
賦詠思齊鄭廣文
理棹好攜三百首
阻風須飲幾千分
耒陽江口春山緑
慟哭應尋杜甫墳

「田光を送る」

九陌　低迷　誰か我に問はん
五湖　流浪　君を悲しむべし
書を著せば　笑破す　蘇司業
賦詠すれば　思ひは斉し　鄭広文
棹を理めて　好く携へん　三百首
風に阻まれては　須らく飲むべし
幾千分
耒陽の江口　春山緑なり
慟哭して　応に尋ぬべし　杜甫の墳

第一句で自らを都に「低迷」する者と認識し、第二句で「流浪」する君と呼ぶ。どことなく杜詩の響きに似るが、第三四句に至りその影響は決定的である。蘇源明と鄭虔は長安時代の杜甫の大親友で、この二人の並列表現こそ杜詩に固有の一典型だからである。杜詩の中に計四例見られる。

廣文到官舍　広文官舍に到りて

繫馬堂階下　馬を繫ぐ　堂階の下
…　…
賴有蘇司業　蘇司業有るに賴りて
時時乞酒錢　時時　酒錢を乞ふ

（「戲れに鄭広文に簡し、兼ねて蘇司業に呈す」『杜詩詳注』巻三）

故舊誰憐我　故旧　誰か我を憐れむ
平生鄭與蘇　平生　鄭と蘇と

（「台州の鄭司戸・蘇少監を哭す」巻十四）

早歲與蘇鄭　早歳　蘇鄭と
痛飲情相親　痛飲　情　相親しむ

（「薛三郎中璩に寄す」巻十八）

舊與蘇司業　旧　蘇司業と
兼隨鄭廣文　兼ねて随ふ　鄭広文

（「九日　五首」其三　巻二十）

すなわち鄭谷は、杜甫と蘇源明・鄭虔らの親密な交際を踏まえて、自らと田光の交わりも彼らのごときと喜ぶのである。さらに第八句では、田光にもし耒陽に行ったら「杜甫の墳を尋ぬべし」と勧める。耒陽にある杜甫の墳墓に君行ってみられよというのは、湖南地方の名所観光ではない。第五句に「三百

首」を携行せよと言及することや、鄭谷が杜甫尊崇の人であることを併せ考えると、杜甫の死霊との邂逅には深い意味が込められていよう。一体、墓地を訪ねて「慟哭」するのは何のためか。

前掲の羅隱「耒陽の杜工部の墓を経」詩に、「屈原宋玉　君（杜甫のこと）が処に隣す／幾駕の青螭ぞ（君の）鬱陶を緩うす」とあり、耒陽の杜甫の墓と屈原の霊が一体となって表現される点が注意される。ここに一つの手掛かりが想起される。「太史公曰はく、〈余、離騒・天問・招魂・哀郢を読むに、其の志を悲しむ。長沙に適きて屈原の自ら沈める所の淵を観、未だ嘗て涕を垂れ、其の人と為りを想見せざるなし〉と」（『史記』「屈原伝」）の例だ。司馬遷が屈原の亡くなった土地を訪れたことは、不条理の内に死んだ屈原の「其の志」「其の人と為り」を現前化させ、彼の霊魂と深く交感する神秘的な体験となった。鄭谷の願いもまた田光が険しい時代を「慟哭」しつつ、杜甫の霊と邂逅することで、自らの「三百首」の深化の機縁を願うことにあろう。「風騒」の文学復活の願望が、そこにある。

広明元年（八八〇）、鄭谷三十歳。試験がうまく行かない中、彼は詩作にわずかな楽しみを見い出す。不遇の中の慰めが、また杜甫に自らを重ねる一因となっていく。

「中年」
漠漠秦雲澹澹天
新年景象入中年
情多最恨花無語
愁破方知酒有權
苔色滿牆尋故第
雨聲一夜憶春田
衰遲自喜添詩學
更把前題改數聯

「中年」
漠漠たる秦雲　澹澹たる天
新年の景象　中年に入る
情多くして最も恨む　花　語る無きを
愁破　方に知るべし　酒に権あるを
苔色　牆に満ちて　故第を尋ぬ
雨声　一夜　春田を憶ふ
衰遲　自ら喜ぶ　詩学を添ふるを
更に前題を把りて　数聯を改む

「中年」にもなって、一向にうだつが上がらぬ己。恨みや愁いは、花や酒でまぎらわすよりない。が「一夜」、鄭谷は思う。自らはもう「衰遲」、晩年の人生なのだと。それなのにまだ何も成就してはおらぬ。なんという不甲斐なさ。ただ静かにふりかえると、そんな中にもこの頃「詩学」に進歩が見られるようになったなと思えてくる。（―この「詩学」は、「詩経」の学問の意でなく、詩歌の学問の意で用いられたことが文献上確認される最初の例[5]―）そこで「自

ら喜び」つつ筆をとって、前作の「数聯を改む」のである。この「衰遅自喜添詩学」の句は、杜甫の「晩節、漸く詩律において細やかなり」（「遣悶、戯れに路十九曹長に呈す」詩『杜詩詳注』巻十八）を想起させる。鄭谷の「詩学」がどんな進境を見せたのか、詩中に何も記されてはいないが、想像を広げるに、世も己も「涙　残陽に滴る」（鄭谷「渚宮乱後の作」―長安での作）、という不幸な時代であっても、自作の詩が先人の「風騒」「騒雅」の心にわずかなりと近づけたと、「自ら喜ぶ」姿がそこにある。鄭谷の喜びは、ある意味「風騒」「騒雅」を措いて外にない。―「残陽の涙」の奥に蔵された「詩学」の喜びを深めるのは、戦乱からの逃走中という悲涼の極においてであるが、これも後述することとする。

二　巴蜀への逃走―杜甫との出会い

広明元年十一月、黄巣は洛陽を、十二月には長安を陥落。翌中和元年（八八一）、僖宗はかつての玄宗同様、四川に蒙塵。空虚となった宮城には軍士や市民が押し入り、略奪の限りを尽くした。その後長安に入城した黄巣は帝位につき国号を大斉と称し、金統と改元する。鄭谷は乱を避けて蜀に入るが、以後、「十年五年　道路の中／千里万里　西復た東」（鄭谷「倦客」詩）という、巴蜀・荊楚地方の漂泊が始まる。これがさらに杜甫との深い一体化をもたらすことになる。

じつは鄭谷に先立ち雍陶（八〇五～？）に、杜甫草堂を訪れた詩がある。一瞥すると、

「経杜甫舊宅」
浣花溪裏花多處
爲憶先生在蜀時
萬古只應留舊宅
千金無復換新詩

「杜甫の旧宅を経」
浣花溪裏　花　多き処
為に憶ふ　先生　蜀に在りし時を
万古　只だ応に旧宅を留むべし
千金　復た新詩に換ふる無し

これは、現在残る文献上はじめて杜甫草堂が詠まれた詩である。杜甫に対し「先生」と尊称する点、また「旧宅を留むべし」という発言は、当時の杜甫受容上きわめて重要である。のみならず「千金」でもあがなうことのできない「新詩」との高い評価は、この時期、蜀出身でもある雍陶によって語られている点が貴重である。杜甫受容が廟堂の文士から地方（ことに蜀）の人士へと確実に浸透していった過程が

見て取れるからである。雍陶の資料はこれのみだが、加えて蜀の孫光憲の杜詩編集の早い事例といった書誌学的事実も併せて見ると、蜀地の杜詩受容がより豊かに見えてこよう。[6]

雍陶に比して、鄭谷の杜甫受容は豊富な痕跡が残っている。

「蜀中」三首 其二　「蜀中」三首 其二

夜多無雨曉生塵　夜に雨無きこと多く 暁に塵を生ず
草色嵐光日日新　草色 嵐光 日日新たなり
蒙頂茶畦千點露　蒙頂の茶畦 千点の露
浣花牋紙一溪春　浣花の牋紙 一溪の春
揚雄宅在唯喬木　揚雄の宅は在れども 唯だ喬木
杜甫臺荒絶舊隣　杜甫の台は荒れて 旧隣を絶つ
却共海棠花有約　却って海棠の花と共に約有り
數年留滯不歸人　数年 留滯して 人を帰らしめず

中和二〜三年（八八二〜三）頃、鄭谷が成都に入ってまもなくのもの。第三句の「蒙頂」は、四川省西南部の蒙山のこと。第六句の「旧隣」は、杜甫に「北隣」「南隣」詩があり、その近隣には元県知事の家などがあったことをいう。今やそうした隣もなしの意。杜甫の旧宅[7]のさびれた描写から、当時、杜甫の故居がほとんど省みられていなかったことが分かる。鄭谷は杜甫の故居を実際に訪問し、自身、黄巣の戦乱を避けて蜀に逃走して来たこともあって、その流浪の生涯に深く思いを致すのだった。ちなみに、かの韋莊が杜甫の旧宅を得て「茅を結んで一室と為す」（韋藹「浣花集序」）のは、さらに二十年後の天復二年（九〇二）のことである。

第七句の「海棠」にも、彼の杜甫への特別な思いが込められている。海棠の花との約束ゆえに、「数年 留滯して 人を帰らしめず」だったというものの、現実には、それまで比較的平穏だった蜀内でも、反乱が相次ぐようになり動けなかったのである。

黄巣の大乱は、四川をのぞくほとんどの地域で藩鎮の自立化を喚起していたが、ついに蜀内でも乱が続発し始めてきた。この政情不安は、中和四年春には、東川節度使楊師立と西川節度使陳敬瑄らとの大紛争へと発展していく。同二・三年の頃というのは、その予震の時期で、千能（阡能とも記す）が西南部で、韓秀昇が東南部で、それぞれ乱を起こした時期だった。群盗はびこる中、蜀中を「瓢零」する鄭谷の姿は繰り返し表現されている。

向蜀還奏計未成　蜀に向かふは　還た奏計　未だ成らざればなり

寒蛩一夜繞牀鳴　寒蛩　一夜　牀を繞りて鳴く

（「興州の江館」）

寇難旋移國　寇難　国を旋移し

瓢零幾聽蛩　瓢零　幾たびか蛩を聴く

（「事を叙し恩に感ず」）

老吟窮景勝　老吟　景勝窮まり

受難損精神　受難　精神を損なふ

（「梓潼歳暮」）

このような経歴が、蜀州を流浪した杜甫に自らをして重ねさせたのは言うまでもない。しかし杜甫への思いは戦乱の詩ばかりではなかった。小自然を詠む詩においてもまた認められるのである。

「蜀中賞海棠」　「蜀中、海棠を賞す」

濃淡芳春滿蜀鄉　濃淡　芳春　蜀郷に満ち

半隨風雨斷鶯腸　半ば風雨に随ひ　鶯の腸を断つ

浣花溪上堪惆悵　浣花溪上　惆悵に堪ゆ

子美無情爲發揚　子美　無情　為に発揚せん

中和年間（八八一～八八五）、乱を避けて蜀にあった時の作。風雨にやられた海棠の花が浣花溪に垂れているのを惜しみつつ、それにしても杜甫の無情なことよ。どうして海棠を詠まなかったのか。代わりに余がひとつ汝を詠んでやろうという。

杜甫と海棠をめぐる後世の発言に関しては、宋・葛立方『韻語陽秋』巻十六に既述するところであるが、ただ同巻で北宋初の銭易の断句「子美　無情なること甚だし／都官（鄭谷のこと）意を著すこと頻りなり」（「海棠譜」巻上、『全宋詩』巻一〇四）を掲げている点に注意したい。鄭谷の海棠へのこだわりに関心を寄せているからである。

鄭谷が「海棠」に執心したのは、鄭谷の慕った薛能（?～八八〇）と深い関わりがある。鄭谷の「故の許昌の薛尚書の詩集を読む」詩（広明元年以後の作）に、こういう。

吟殘荔枝雨　吟じ残る　荔枝の雨

詠徹海棠春　詠じ徹す　海棠の春

この「荔枝」とは、薛能の「荔枝」詩（『全唐詩』巻五六一）を受けたもの。その序にいう、「杜工部、

両蜀に老居するに、是の詩を賦さず。豈に意有りて及ばざる歟。白尚書に曾て是の作有るも、興旨の卑泥にして、詩無きと同じ。予、遂に之が為に題す。愧じず負かず、将来の作者の以て其れ荔枝の首唱となるに。愚、其れ庶幾ふ」と。またこの「海棠」も、薛能の「海棠」詩（巻五六〇）を受ける。その序にいう、「蜀の海棠に聞有り、而れども詩に聞無し。杜子美、斯において興象の出づる靡し。没して懐有り。（海棠の美の）天の厚余なること、謹んで敢へて譲らず。風雅の尽く蜀に在るを、吾其れ庶幾ふ」と。

薛能は嘉州刺史を務めたことがあって、「初めて嘉州を発す寓題」詩（巻五六〇）にいう、「唯だ聞く杜鵑の夜／海棠を見ざるの時」と。ただホトトギスの声だけでは物寂し、海棠の花もあらまほしというのである。蜀地の海棠の美しさに目を見張った経験をもつがゆえに、杜甫が詩に詠んでいないのは驚きだ。それならば自分がその先駆けにならんと考え、この「荔枝」「海棠」詩を書いたのだと知れる。薛能の詩の出来ばえは、鄭谷の心に「吟じ残る」ほどであり、また余すところなく「詠じ徹す」と思われ、胸に深く刻みこまれたのだった。

では、鄭谷はいつ薛能を知ったのか。乾寧三年（八九六）、鄭谷四六歳のとき自ら「雲台編」を編むが、その「自序」にこう記す、

> 薛許昌能、李建州頻、（余の）晩輩をもって待せられずして、唱和の流に預かり、忝なくも得る所多きを為す。挙場に游ぶこと凡そ十六年、著述は千余首に近きも、自ずから可なるは幾ばくも無し。

鄭谷が初めて「挙場に游」んだ咸通十三年（八七二）、一二歳頃、薛能は京兆尹の要職にあり、幸運にもその知遇を忝なくすることができた。その折、杜甫の海棠を話題にしたことがあったのか、委細は不明だが、鄭谷が右の「故の許昌の薛尚書の詩集を読む」詩を書いた年には、薛能はこの世を去っているから、この「蜀中、海棠を賞す」詩を詠みながら、生前の薛能を回想していたのではないか。

ちなみに、この薛能は当時、杜詩受容の重要な一翼を担った人物だった。宋・孫僅の言にいう、「（杜）公の詩は支ふるに六家を為す。孟郊は其の気焰を得、張籍は其の簡麗を得、姚合は其の清雅を得、賈島は其の奇僻を得、杜牧・薛能は其の豪健を得、陸亀蒙は其の瞻博を得。皆、（杜）公の奇偏に出づるのみ」

（「杜工部詩集を読む序」）。薛能詩の「豪健」さは、思うに「黄河」詩の「何れの処か　崑崙より発し／乾を連ね　復た坤を浸す／波の渾ては　雁塞を経／声の振るふは　龍門よりす／岸の裂くるは　新衝の勢ひ／灘の余すは　旧落の痕」（『全唐詩』巻五五八）あたりが筆頭である。また時世の暗さを払う英雄を待望する思いから、「嘉州後渓に游ぶ」詩では、「当時の諸葛　何事をか成す／只だ合に終身　臥龍と作る」（巻六六一）と詠んだ。「風騒の地に委ねて　主無きを苦しむ／此の事　聖君　終に若何」（「杜舎人に投ず」巻五五九）とも嘆いた。その心根は杜詩の「豪健」と同一の趣がある。その意味で、薛能は「風騒の人」鄭谷の先輩格だったといえる。

鄭谷の詩論に戻る。杜詩の盲点に気づいた鄭谷が、「海棠」を詩に取り上げたことは言を俟たない。かくて生まれた一首が、「穠麗最も宜し　新たに雨に著くを／嬌饒全く在り　開かんと欲するの時／…朝に酔ひ暮に吟じ　看れども足らず／羨む　他の蝴蝶の深枝に宿るを」（「海棠」）だった。後に方回『瀛奎律髄』巻二七に、「亦た海棠（の表現）に充ち案ずるに祖なるべし。末句は風味有り。是くの如く蝶の是の花に宿るを得ざるを恨む」と称えられる句である。鄭谷が大いに気を吐いた様子が彷彿される。蜀地における杜甫尊崇の密度は、薛能よりこの鄭谷においてより一層深い。

実力ある文人官僚らを主とする杜詩受容は、文学史の出来事としては大きいけれども、それは主に廟堂に連なる知識人の範囲に止まる。しかし、それが徐々に中下層の官人らに及ぶようになると、より分かりやすくかつ親しみの籠もった形になって広がっていく。その杜詩受容の進行した形を、鄭谷の詩は体現してみせてくれる。鄭谷や雍陶・薛能らの杜甫理解は、文学史の事件からはほぼ看過されてきたが、杜詩受容の裾野の拡大は注目すべき現象であり、そのこと自体、これも文学史の一事件なのである。

三　数度の巴蜀・荊楚行――杜甫理解の深化

唐末を揺るがした大乱、黄巣の乱は十年に及んだが、経済的破綻や有力臣下の朱温（のち全忠の名を賜る）の唐朝への寝返りなどもあって、中和四年、黄巣は敗死。翌、光啓元年（八八五）春、僖宗は長安に帰還、鄭谷もともに戻ることとなったが、長安はすっかり荒廃していた。

「長安感興」　「長安感興」
徒勞悲喪亂　徒労たり　喪乱を悲しむ
自古戒繁華　古より繁華を戒む
落日狐兔徑　落日　狐兔の径
近年公相家　近年　公相の家
可悲聞玉笛　悲しむべし　玉笛を聞くを
不見走香車　見ず　香車の走るを
寂寞牆匡裏　寂寞たり　牆匡の裏
春陰挫杏花　春陰　杏花挫く

第三四句は実写である。同じ情景を詠んだ韋荘（前述の杜甫草堂の再建者兼主人）の「秦婦吟」のごときは、全編が破壊・虐殺・廃墟の描写で埋め尽くされ、「舞伎歌姫　尽く暗捐（あんえん）せられ／嬰児稚女　皆生きて棄てらる／…忽ち看る　庭際に刀刃の鳴り／身と首と　支離なること俄頃に在るを／…昔時　繁盛皆埋没し／挙目凄凉　故物無し／内庫　焼いて錦綉の灰と為り／天街　踏み尽くす　公卿の骨／…百万の人家　一戸無し」等と、すさまじさの極みである。羅隠また詠む「乾坤　墊裂（てんれつ）して　三分在り／井邑　催残して　一半は空なり」（「江亭にて裴皥に別る」詩）、「生霊　寇盗尽き／方鎮　改まりて更に貧なり」（「乱後、友人に逢う」）と。みな晩唐の時事を活写した「詩史」（晩唐・孟棨「本事詩」）である。「詩史」の評語が定着するのは北宋だが[8]、晩唐・五代の頃盛んにこの種の作品が作られたことの反映として、孟棨の「詩史」があることを、これは示す。

平穏はつかの間、今度は李克用・王重栄らの兵乱により、都は再び兵塵にまみれることとなる。僖宗は興元（梁州）に出奔。鄭谷も二度目の巴蜀行だった。内戦は巴蜀一帯に広がり、混乱を深めていく。これが彼の杜甫理解を決定的に深化させることとなった。もともと荊州が鄭谷の郷里であったこともあるが、巴蜀・荊州での長い流浪体験は、杜甫との一体感をさらに深化させたのである。

「奔避」　「奔避」
奔避投人遠　奔避して　人の遠きに投ずれば
漂零易感恩　漂零　恩に感じ易し
愁髯霜颯颯　愁髯　霜　颯颯たり
病眼淚昏昏　病眼　涙　昏昏たり
孤館秋聲樹　孤館　秋声の樹
寒江落照村　寒江　落照の村
更聞歸路絶　更に聞く　帰路絶たれ

新寨截荆門　新寨　荆門を截つと

光啓二年秋の作。再び蜀に「奔避」して「漂零」。そこから長江を下り荆州の故居に帰ろうとするが、荆州は反乱軍に囲まれていた。光啓元年九月には秦宗権が、また同二年末には弟の「（秦）宗言、荆南を囲むこと二年」（『資治通鑑』巻二五六）だったため、峡谷に足止めされたのである。「流浪の身の上ゆえ人の恩に感じやすい」は、杜甫の口調そのもの。「愁いを帯びた髯は　わびしく風に吹かるる霜の草／病んだまなこは　途方に暮れし涙の洞」――これまた杜甫調。秋の落日の旅籠にて聞いた知らせは、「帰路絶たれ／新しい塞が　荆門の路を断ったと」。荆門は荆州の荆門山。荆州の故居に帰ろうとしていた矢先、その喉元を封鎖されてしまったのである。戦乱による行路難は、杜甫の身上との一体化を濃くしていく。次例の「峡中寓止」二首は、その典型。

其一

荆州未解圍　荆州　未だ囲みを解かず
小縣結茅茨　小県　茅茨を結ぶ
強對官人笑　強ひて対す　官人の笑ひに
甘爲野鶴欺　甘んじて為す　野鶴の欺りを
江春鋪網闊　江春にして　網を鋪くこと闊く
市晚鬻蔬遲　市晚れ　蔬を鬻ぐこと遲し
子美猶如此　子美　猶ほ此くの如し
翻然不敢悲　翻然　敢へて悲しまず

光啓三年（八八七）早春。鄭谷三六歳。秦宗権らによる荆州の包囲はいまだ解けてはいなかった。やむを得ずこの峡谷に「茅茨」を結び、役人にお愛想笑いをしつつ、似非隠者のまねをする。ここじゃ漁師が春の日差しの中で網をひろげ、露店が遅くまで野菜を売る。峡谷の生活にしんみりした情緒が湧いてくるが、悲しむことはない。かねて子美もそうだったと。――じつは杜甫も夔州の渓谷に庵を結び菜園を設け、魚を食する暮らしをしていたことがある。一例として大暦二年秋、夔州の東屯での作（『杜詩詳注』巻十九）。

「奉酬薛十二丈判官見贈」「薛十二丈判官の贈らるるに酬い奉る」

臥病識山鬼　病に臥して　山鬼（山人、自身の喩え）を識り

爲農知地形　農と為りて　地形を知る
誰矜坐錦帳　誰か　矜(あわれ)まん　錦帳に坐するを
苦厭食魚腥　苦(はなは)だ厭ふ　魚の腥(生臭)きを
食するを

本来、都で「錦帳に坐する」べき職務（工部員外郎）にあるのに、農民となって東屯の公田を耕し、また峡谷の魚を食していることを嘆いた詩だ。――あの杜甫もそうだったと思った時、悲しみよりも共感の方が「翻然」と湧いてきたという。この不思議なシンクロ感。「声調悲涼、…不朽の名を享く」と、清・薛雪（『一瓢詩話』第二二七条）に評される鄭谷だが、いつしかこの峡谷を「悲涼」の先人と同道する喜悦の逆説へと、自分が裏返されていることを意識する。ここに鄭谷にとってもう一つの「詩学」の扉――慰藉の詩――が開くのである。

其二

傳聞殊不定　伝へ聞く　殊に定まらずと
鑾輅幾時還　鑾輅(らんろ)　幾時か還る
俗易無常性　俗易(かわ)り　常性無く
江清見老顔　江清く　老顔を見ゆ
夜船歸草市　夜船　草市に帰り
春歩上茶山　春歩　茶山に上る
寨將來相問　寨将　来りて相問へば
兒童競啓關　児童　競ひて関を啓(もう)す

「峡中寓止」の其二。伝聞するに、まだ政情は落ち着いていないよう。天子の御駕はいつ都に戻られるのか。世相は転変として定まるところなし。清き江面に似合わぬ己の衰老の顔。庶民の日々の暮らしと同居する塞の険呑な気配。子供らが将兵に競って関塞の方角を教える姿はけなげだが、「子美の悲しみ」の陰翳を帯びて、ある意味やるせない。

「峡中」　「峡中」

萬重煙靄裏　万重なること　煙靄の裏
隱隱見夔州　隱隱として　夔州見ゆ
夜靜明月峽　夜静なり　明月峡
春寒堆雪樓　春寒し　堆雪楼
獨吟誰會解　独吟するも　誰か会解せん
多病自淹留　多病　自ら淹留す
往事如今日　往事　今日の如し
聊同子美愁　聊か子美の愁に同じ

光啓三年、万州（今の四川省万県）より夔州に向かう峡中の作。明月峡は巫峡の別名。堆雪楼は不明、白帝城と関連するのかどうか。己の「独吟」など誰が理解してくれよう。「多病」をかこちながら、この「小県」にしばし逗留するよりなし。過ぎし唐の遺声が再現される今日。「子美の愁に同じ」きを「擬作詩」する翳で、どこか慰めを得ているふうでもある、そのあわいの不思議な同居性。「（多）病」の語は杜甫の常用語。「万里悲秋　常に客と作り／百年多病　独り台に登る」（「登高」）のほか、夔州での同様の作を一二例掲げれば、

老病巫山裏　老病す　巫山の裏
稽留楚客中　稽留す　楚客の中
（「老病」『杜詩詳注』巻十五）

舟中得病移衾枕　舟中　病を得て　衾枕を移し
洞口經春長薜蘿　洞口　春を経て　薜蘿長ず
（「峡中覧物」同巻十五）

「多病」「稽留」などの障碍が、両者の生をして響かせ、それが自身をして「聊か子美の愁に同じ」と感じさせたのだ。同時に、「敢へて悲しまず」の音色も響いている。この悲しみさえもが杜甫と結ばれていると思うと、静かな慰藉が運ばれてくるのである。この慰藉の存在は、鄭谷の「江上、風に阻まる」詩に、「聞道く、漁家　酒初めて熟すと／晩来、翻って喜ぶ　頭を打つ風」と詠み、逆風の中、舟が進まずかえって酒が飲める好運に出くわしたと喜ぶごとくに、また「初めて京師に還る」詩で、すっかり荒廃した都を見ても、「火力も地力を銷すあたはず／乱前　黄菊　眼前に開く」と廃墟に咲く花に救いを見出すがごとくに、鄭谷の本質的部分である。彼の杜詩受容が「騒雅」「風騒」を柱にした志操堅固なものでありながら、「聊か子美」似と謙遜しつつも理に縛られない、どこか子美とは異種のやわらかな個性のあったことは注意される必要がある。

四　右拾遺そして退隠——嘆きは尽きず

景福二年（八九三）秋冬の頃から天復二・三年（九〇二・三）は、鄭谷が仕官した時期で、京兆府参軍・右拾遺・補闕などに就いている。今、乾寧元年（八九四）以後の作から幾つか拾うと、

悠悠干祿利　悠悠　祿利を干し
草草廢漁樵　草草　漁樵を廃す
身世堪惆悵　身世　惆悵に堪へ
風騷頗寂寥　風騷　頗る寂寥

（「懐を元秀上人に寄す」）

乾寧元年（四三歳）、朝廷の官となって後の作。憂いながら「祿利」に追われ、漁樵のような暮らしからは遠のいた。この生涯、日々傷みに耐え、この頃は「風騷」を嗜むこともすっかりできぬと嘆く。

故國無消息　故国　消息無く
流年有亂離　流年　乱離有り

（「揺落」）

乾寧二年（八九五）、鄭谷が右拾遺にあった時の作。同じ拾遺の官にあった杜甫への思いはいよいよ深まったと思われる。この年、鳳翔節度使の李茂貞らが挙兵、昭宗を脅して南山に石門にと奔走させたりした。郷里からの消息は途絶え、政局は混乱を続けるばかり。杜甫の「酔ひを取る　他郷の国／相逢ふ故国の人」（「白帝城に上る」詩）との類似は、同じ拾遺の官に就いた者同士の親密感の語であろう。

且言無所補　且つ言ふも補ふ所無し
浩嘆欲何如　浩嘆　何如せんと欲す
宮闕飛灰燼　宮闕　灰燼飛び
嬪嬙落里閭　嬪嬙　里閭に落つ

（「順動の後、藍田の偶作」）

乾寧三年（八九六）、鳳翔節度使の李茂貞が都に迫るや、昭宗は華州に奔った。当時、鄭谷は補闕にあった。都は灰燼に帰し、妃嬪らも里閭へと逃げ落ちる中、自らは何もできずただ深いため息をつくしかなかったのである。

半年奔走頗驚魂　半年　奔走　頗る魂を驚かすも
來謁行宮淚眼昏　来たりて行宮に謁すれば　涙眼昏し
…　…
兵革未休無異術　兵革　未だ休まざるに　異術無し
不知何以受君恩　知らず　何を以てか君恩を受くるを

（「三峰に奔問されるに近墅に寓止す」）

乾寧四年の作。鄭谷、都官郎中に遷る。華州に奔

った昭宗は、そこの府署を行宮としていた。鄭谷は近くの華山の雲台観に「寓止」し、例の自著「雲台編」三百首を編んでいた。やがて行宮で拝謁、涙に濡れた眼にはまっ暗な世が映る。まだ戦乱は止まぬが、特別な経術のない己。一体、何をもって君恩を受けているのかと。

「前寄左省張起居一百言。尋蒙唱酬見譽過實。即用舊韻重答」

「前に左省の張起居に一百言を寄す。尋いで唱酬し誉められるること実に過ぎたるを蒙る。即ち旧韻を用ゐて重ねて答ふ」

減瘦經多難　減瘦は　多難を経
憂傷集晚年　憂傷は　晩年に集まる
吟高風過樹　吟ずるは　高風　樹に過ぎるに
坐久夜涼天　坐するは　久夜　天に涼しきに
旅退慚隨衆　旅退　衆に隨ふを慚じ
孤飛怯向前　孤飛　前に向かふに怯ゆ
釣朋蓑叟在　釣朋　蓑叟在り
藥術衲僧傳　藥術　衲僧伝ふ
……　……
預愁搖落後　愁に預ること　揺落の後
子美笑無氈　子美　氈無きを笑ふ

趙昌平によれば、光化・天復年間（八九八～九〇四）の後の作とする。鄭谷の最「晩年」の詩。多年の苦難の中、ことに晩年に集中した「憂傷」は、すっかり身をやつれさせた。己の進退はただ衆に従うだけで、単身、剛気に突き進むことを慴れる不甲斐なさ。衰老の釣り仲間や、医薬の術を伝えてくれる貧僧が、わずかな慰め。この秋、ただ愁いに沈むばかりの日々。あの杜甫の詩にあるように、貧しい暮らしで毛氈もないと苦笑するばかり。この杜詩は、「戯れに鄭広文に簡し、兼ねるに蘇司業に呈す」の末、「才名四十年／座客　氈無きこと寒し」を踏まえる。鄭谷の人生は最後まで杜甫とともにあった。それはまた報われぬ「騒雅」を貫いた人生でもあった。天復二・三年（九〇二・三）頃、鄭谷は朝廷を退き帰隠、四川地方を漂泊し、後梁開平四年（九一〇）、唐の滅亡を追うようにして没したのである。

おわりに

当時、杜甫の墓や李白の墓などを訪ね、古の御世

をしのびその霊魂と語り合うことが広まりつつあった。伝説の詩人の面影を現地に訪ねることが、文人らのひそかな慰めとなっていた。それほど晩唐の士大夫にとって未来に未来なく、過去の追懐に居場所を見い出すしかなかったのである。ただわが身の内にいつも杜甫を宿らせながら旅を同道した人物となると、稀である。唐朝の最終楽章の中、杜甫の言葉とともに各地を漂泊し、その精霊の再臨を待望し続けた人物という意味において、鄭谷の杜甫受容は小さからぬ意味を持つ。それは一人の人間の事跡(その積み重ねとしての年譜)と作品を結びつけて読み、かつ詩を作る読み方であり、後年の北宋人のあり方につながる。ことに実地に訪ねながらの杜甫受容の面からすると、黄庭堅や陸游の先駆けをなすものであり、その史的意義は大きい。

ただ杜詩の擬似詩ゆえにオリジナリティは薄れ、ために評価は高くない。それどころか不当な扱いすらある。いわく「惜しむらくは其れ風教に補有るも、而して之を重んずる者は、村学の堂中の児童を以て諷誦せしめ、往往にして視るに発蒙の具と為し、嘗て李杜の詩将の壇に偏裨(補佐の将)を獲歯(列に入る意)せざるを」(宋・童宗説「雲台編後序」)と。村の子供らの啓蒙の具でしかないというのである。

しかし、「村学の堂中の児童」にも分かる平易な表現の工夫にこそ、彼本来の面目がある。峡中の「児童」が「競ひて関を啓す」(前掲「峡中寓止」)様子を間近で、どこか胸の痛みをもって見ている鄭谷。「漸く解す　巴児の語／誰か憐れまん　越客の吟」(「通川の客舎」)ともいう。そんな巴峡の庶民と長年にわたり、ともに暮らす中で身についた民生的視点。そこから生まれてきた杜甫とシンクロする思い。それはたとい児童の「発蒙」に用いられても、何ら恥ずかしくはなかったはずである。彼らに真に杜詩の言葉が届くのであれば、それこそが杜甫の思いの成就なのである。欧陽修も「余、児為りしとき猶ほ之(一鄭谷の詩)を誦」(『六一詩話』)した思い出を持っていた。それが後年の欧陽修の古典的教養主義の一基礎となっていったと考えると、まさに恩恵は少なくない。鄭谷は村の児童にまで杜甫の詩風や「騒雅」的美刺を届け得た、啓蒙的業績を残した人物だったといえる。

しかし結局、鄭谷は杜甫の不遇・流離の徒にして、かつ無力に終わった人である。鄭谷いわく、「半生、漂離足る」(「時相に投ず十韻」)、「半生、逆旅を悲し

む」（「事を叙して恩に感ず」）、「流落復た蹉跎」（「渠江旅思」）、「薄宦、渾（すべ）て無味」（「詠懐」）と。されば、君主・士大夫層に向けて杜詩を宣揚した廟堂の中唐人とは比べられない。また鄭谷の詩学的意味を解さず、「詩将の壇」のどこに列するかを論じても何の意味もない。鄭谷の真価は杜甫の知悉者としてその「騒雅」をまとい、「半生、漂離（逆旅）」の中、共振的かつ「翻然　敢へて悲しまず」の慰藉的筆致を、流浪する各地で振るったことにある。また時代の終焉に立ち会い、自らの詩をその柩に納めたことにある。

さらに杜甫の側からこの時代を見れば、彼の言葉は、鄭谷の胸中でかつてないほど無力感に苛まれながら、唐朝の最期を見届けることとなった。長きにわたる流浪の上、世のどん底まで下降した杜甫の詩は、北宋誕生期の高位の廟堂人から、ある意味その「興旨の卑泥」（前掲「荔枝」）を疎んじられたからだろう、まったく支持は得られなかった。しかし、やがて政権が安定してくると、それは汚泥から生まれ出る清廉な蓮のように、格別の聖性を帯びて甦ってくる。その詩的聖性は、杜詩が誰よりも泥濘に沈淪しながら、また誰よりも「風騒」の根を豊かに張っていたからこそ、最もきわだつものとなった。

鄭谷により唐朝の遺骸とともに陪葬された杜詩的「騒雅」「風騒」は、その後韋荘の詩集や『又玄集』などに残光を留めるものの鄭谷ほど終始的ではなく、結局、北宋初の王禹偁により商州という田舎町で劇的に再発見されるまで約百年の時を待つこととなる。「子美の無情」（前掲「蜀中、海棠を賞す」）により「詩に聞無し」（前掲「海棠」序）、「為に発揚せん」（「蜀中、海棠を賞す」）と嘆き宣言された海棠だが、この「無情」の運命は外ならぬ「子美」自身にも降りかかった。五代の分裂期、杜詩は廟堂人の美意識から遠ざかってしまうのだが、またそれは鮮烈な驚嘆をもって再発見されるための意味ある「無情」の時となったといえよう。

注

（1）後藤秋正『中国中世の哀傷文学』（研文出版　二〇〇六）の「唐詩に詠じられた杜甫の墓」に関連する指摘がある。

（2）鄭谷の論文は近年、少しずつ見られるようになってきた。とはいってもまだ計十数編という程度だが。その中で杜甫との関連を指摘するのに次のものがある。霍

有明「論晩唐詩壇巨擘鄭谷的詩歌創作」(『人文雑誌』一九九二-二期)は、「鄭谷還有很多反映唐末僖宗、昭宗時代的動乱社会現実的詩作、得称詩史」とごく簡単に指摘。また鍾祥「末代風騒—論晩唐詩人鄭谷的詩」(『河南大学学報』三六-二　一九九六)は、「値得我們注意的是、鄭谷与杜甫的生活経歴是那様的相似、杜甫経歴了安史之乱、鄭谷経歴了黄巣起義」云々と、両者の関連について初めてまとまった言及をする。ただし、それでもわずか一頁にすぎない。

一方、張興武『五代作家的人格与詩格』(人民文学出版社　二〇〇〇)は、鄭谷を白居易に倣った人物として掲げ、杜甫には言及しない。

(3)『鄭谷詩集箋注』(上海古籍出版社　一九九一)刊行以後、鄭谷研究が始まったといっても過言ではないほど、研究が遅れていた。本書の趙昌平氏の「前言」は、体系的な鄭谷論として有益だが、杜甫との関連の文学的考察は詳しくない。また傅義『鄭谷詩集編年箋注』(華東師範大学出版社　一九九三)は趙箋注よりさらに詳細との世評だが、入手できなかった。

(4)作品の繫年は、『鄭谷詩集箋注』の趙昌平「鄭谷伝箋」による。王達津「鄭谷生平系詩」(『南開学報』一九八一—第一期)もあるが、これを補充したのが趙箋である。

(5)近年、「詩学」の研究が盛んになりつつあるが、鄭谷の「詩学」の具体的内容はほとんど言及がない。小論がそれを補うことになればと願う。

(6)陳尚君『唐代文学叢考』(中国社会科学出版社　一九九七)「杜詩早期流伝考」はすぐれた論文だが、雍陶や鄭谷についての言及が乏しいのが惜しまれる。

(7)古川末喜「杜甫の浣花草堂—その外的環境、地理的景観について」(『中唐文学会報』九　二〇〇二)がある。

(8)浅見洋二『中国の詩学認識』(創文社　二〇〇八)「文学の歴史学」に北宋の「詩史」説を詳述する。ただし、晩唐・五代への言及はない。

(9)古川末喜「杜甫の野菜作りの詩」(『未名』二五　二〇〇七)、「東屯の稲田一百頃—詩人杜甫の米作りの詩」(『佐賀大学文化教育学部研究論文集』十二—二二〇〇八)などがある。

附記　小論は、第十七回名古屋大学中国語学文学研究会(08・6・28)での講演原稿に加筆修正したものである。その折、今鷹眞先生・周先民先生・岡田充博先生らより賜った貴重なご意見に感謝申し上げます。